



これからはじめる Red Hat OpenShift Service on AWS (ROSA)

Red Hat K.K. Technical Sales
Hirofumi Kojima
2022.06

Agenda

- コンテナはなぜ使われるのか？
- コンテナ利用に必要なもの
- コンテナはどのように使われるのか？
- なぜKubernetesが必要なのか？
- Red Hat OpenShiftの主な機能
- Managed OpenShift Service (OpenShift クラウドサービス)
- Red Hat OpenShift Service on AWS (ROSA)

コンテナはなぜ使われるのか？

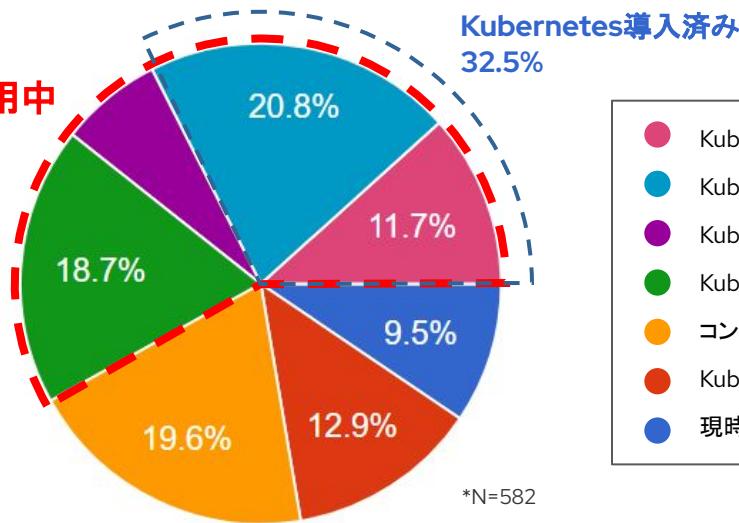
多くの企業で利用が進むコンテナ

半数を超える企業でコンテナが使用され、
約1/3はKubernetes(コンテナ基盤ソフトウェア)を使用しています。

あなたの企業(もしくは支援先企業)ではKubernetesを利用していますか?

※Kubernetesのプロダクトは問いません。

コンテナ使用中
58.0%



- Kubernetesの本番利用を行っている
- Kubernetesの検証、導入構築を行っている
- Kubernetesの利用を計画/検討している
- Kubernetesに関する情報収集は行っている
- コンテナ(Dockerなど)は使用/検討中だがKubernetesはこれから
- Kubernetes/コンテナに関してはよく知らない
- 現時点では使うことは考えていない

なぜコンテナを使うのか

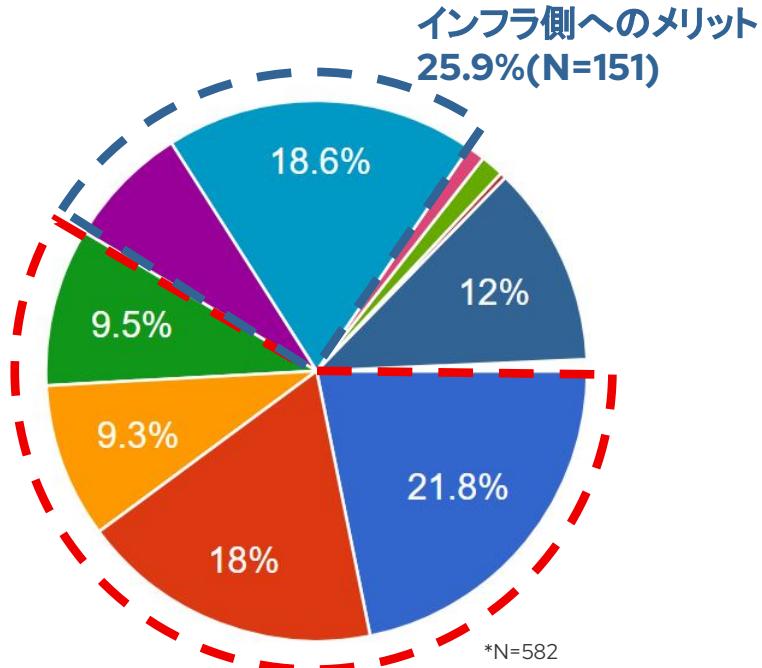
コンテナをうまく使うことで、**ビジネスメリット**を得られるから

コンテナ導入の期待値

既存システムと比べ、コンテナ(Kubernetes)導入に期待する一番のビジネスメリットはなんですか？

アプリ側へのメリット
58.5%(N=341)

- 開発生産性の向上
- 運用の効率化
- ...

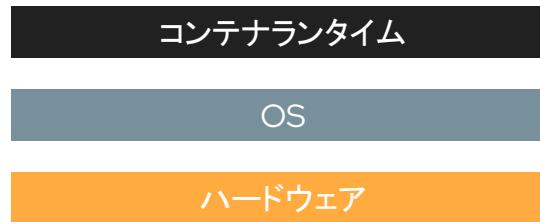
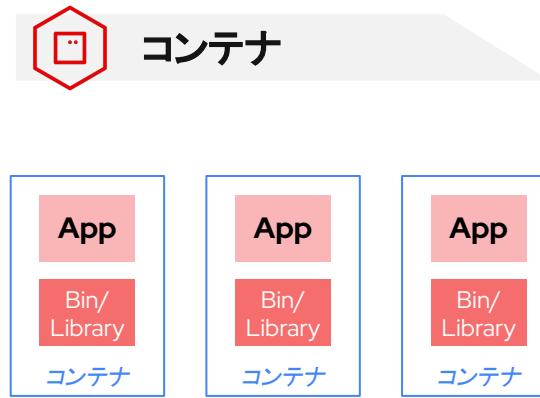
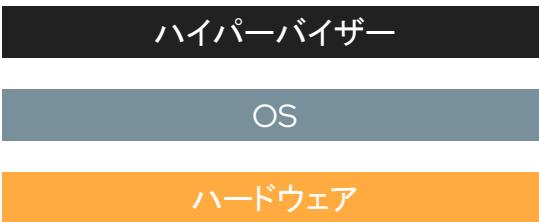


- アプリケーション開発の生産性向上、アジリティ向上
- アプリケーション運用の効率化、コスト削減
- アプリケーションリリースサイクルのスピード向上
- アプリケーションのポータビリティ(可搬性)
- インフラリソースの集約率向上、コスト削減
- インフラリソース管理の運用自動化、プロセス改善
- SoE(IoTやAI、機械学習など)の促進
- SoRのアプリケーションモダナイゼーション
- SoRのデータ利活用/マイグレーション
- まだよくわからない

コンテナとは一言で言えば何か？

アプリケーション本体と、
アプリケーションの実行に必要なライブラリ・依存関係など、
必要最小限の要素をひとつにパッケージした姿

コンテナと仮想マシンの違い



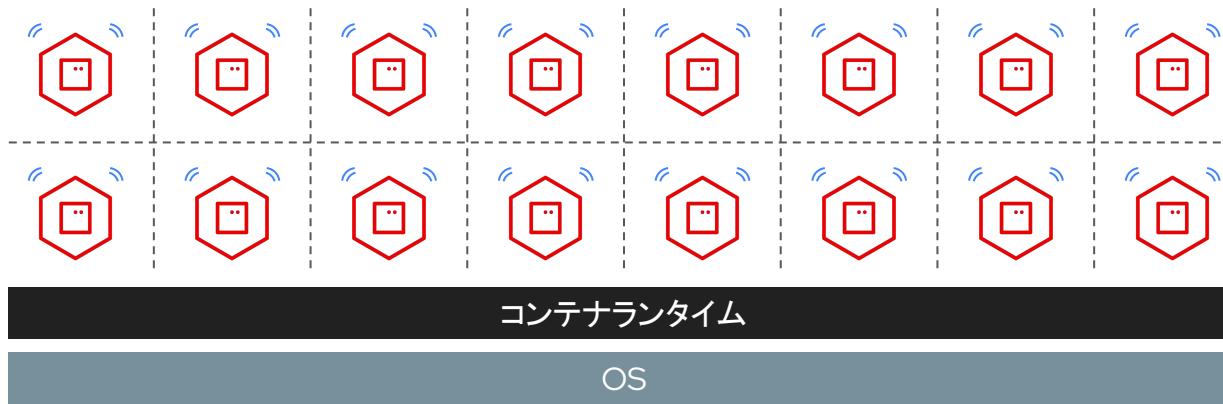
コンテナの特徴

▶ OS上で稼働

- カーネルが持つ機能を利用する。
- 1つのホストの上で複数のコンテナを同時に稼働できる。

▶ 隔離性

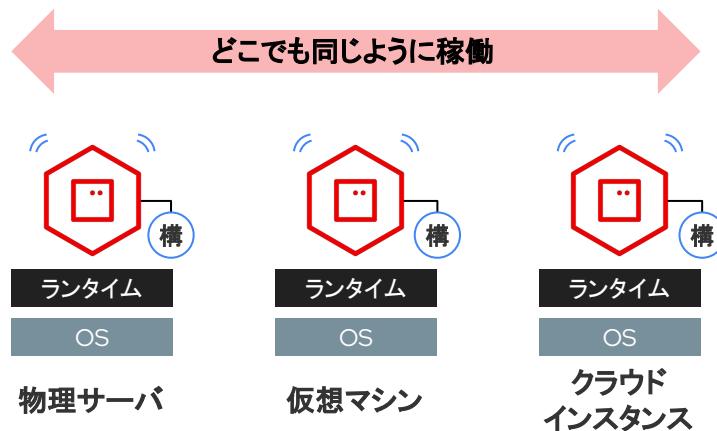
- ホストのカーネルを共有するが、コンテナ同士は隔離され互いに競合しない。
 - コンテナ同士で通信可能にはできる。



コンテナの特徴

▶ 可搬性 (Portable)

- どの環境でも同じように稼働する。
 - 環境に依存する構成情報はコンテナとは別で持つ。



▶ 軽量

- OSが無く、必要最小限の要素のみ持つ。

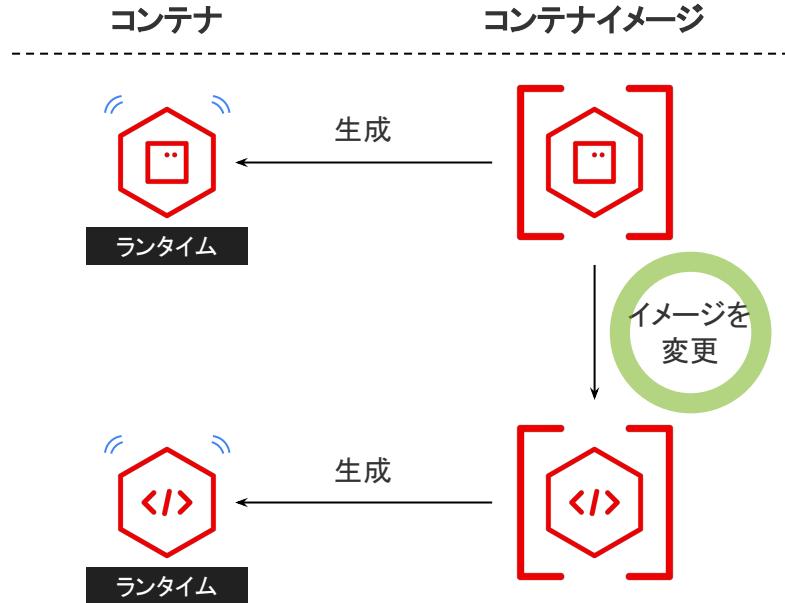
▶ 起動が高速

- OS起動時間を省略できる。

	仮想マシン	コンテナ
容量	1桁 ~ 2桁 GB	2桁 MB ~ 1桁 GB
起動時間	数分	数秒

コンテナの特徴

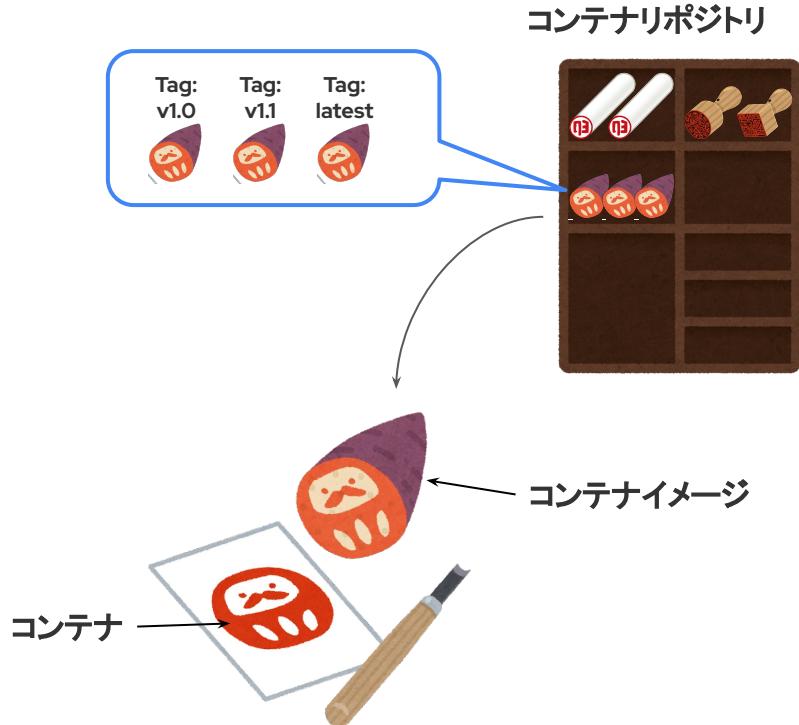
- ▶ **イメージから生成**
 - コンテナイメージから複製して作られる。
- ▶ **不变性 (Immutable)**
 - 同じコンテナイメージから起動したコンテナは、毎回必ず同じものとなる。
- ▶ **揮発性 (Ephemeral)**
 - コンテナに加えた変更は、コンテナが停止すると失われる。
 - コンテナ自身に永続性は無い。
 - コンテナに変更を加えたい場合は、コンテナイメージを変更して新しくコンテナを起動する。
 - 古いコンテナは破棄する。



コンテナを使うために 必要なもの

コンテナイメージ

- ▶ **コンテナの素**
 - あらゆるコンテナはイメージから作られる。
- ▶ **コンテナリポジトリで管理**
 - 同じイメージは系列立てて管理される。
 - それぞれのイメージはタグで区別される。
- ▶ **利用できるイメージ**
 - パブリックなイメージ
 - Web上で公開されている。
 - プライベートなイメージ
 - ユーザーが独自に作る。
- ▶ **イメージの作り方(イメージのビルト)**
 - 既存イメージに追加変更を加えてビルトする。
- ▶ **セキュリティには要注意**
 - 特にパブリックなイメージは「信頼できる提供元のイメージか」「脆弱性は無いか」など注意すること。



コンテナレジストリ

▶ コンテナイメージの保管場所

- コンテナイメージはレジストリで保管され、共有される。
 - コンテナレジストリからイメージをダウンロードすることを “Pull” と呼ぶ。
 - コンテナレジストリにイメージをアップロードすることを “Push” と呼ぶ。

▶ 使用できるコンテナレジストリ

- パブリックなレジストリ
 - [Docker Hub](#) や [Quay.io](#) など、Web上で公開されたレジストリ。
- プライベートなレジストリ
 - イメージを非公開にするため、独自に構築したり、クラウドのサービスを使うなどして準備する。

コンテナレジストリ



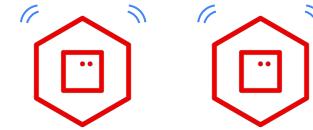
コンテナランタイム

- ▶ **コンテナが稼働するために必要なソフトウェア**
 - コンテナの作成・実行・停止・削除などのライフサイクルの管理をする。
 - ランタイムがなければコンテナは動かない。

▶ 有名なランタイム

- ローカル環境で使うとき
 - [Docker](#) (RHEL7で採用)
 - [Podman](#) (RHEL8, 9で採用)
- コンテナ基盤(Kubernetesなど)で使うとき
 - [cri-o](#) (Red Hat OpenShiftで採用)
 - [containerd](#)

※ ランタイムの役割や機能はおおむね同じだが、思想・内部アーキテクチャは変わるため微妙な違いはある。



ランタイム

ランタイムの役割

- コンテナのライフサイクル管理
 - ハードウェアリソースの分離
 - モニタリング・ロギング
 - コンテナイメージのPull・管理
 - コンテナイメージのビルド・Push
- ...etc

コンテナは
どのように使われるのか？

アプリケーション開発現場でのコンテナのうまい使いかた

▶ アプリケーション本番稼働の問題

○ 環境への依存

- 微妙な環境の違いによって、開発環境とステージング・本番環境で挙動が違うなどの問題が起こりえる。

○ システム基盤への依存

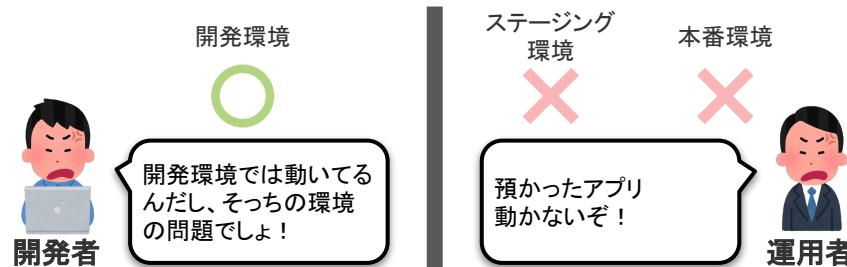
- 別の基盤(例えばオンプレミスからクラウド)へのアプリケーション移行が難しい。

▶ コンテナを使うことによる解決

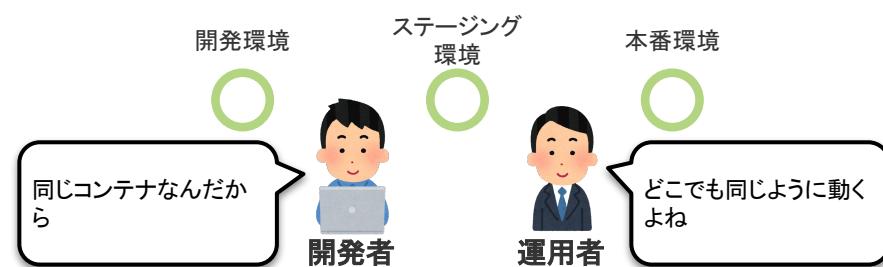
○ 環境やシステム基盤への依存を極小化

- コンテナは基盤への依存性が低いため、環境ごとに挙動が違うことを防ぐことができる。
- 基盤ごとの違いはコンテナ自体とは別で吸収できるため、アプリケーションの移行が比較的容易である。

コンテナ化されていないアプリケーション



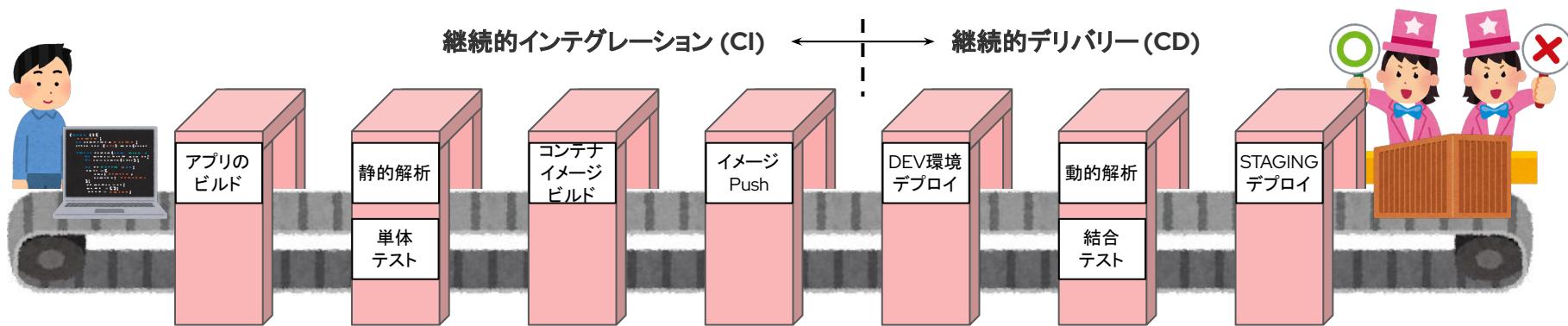
コンテナ化されたアプリケーション



開発～デリバリーまでのコンテナのうまい使いかた

▶ 繼続的インテグレーションと継続的デリバリー(CI/CD)

- アプリケーションのビルドからコンテナのビルド、デプロイまでを自動的に行うようとする。
 - 途中で行うコードの解析やテストなども自動化する。
 - CI/CD用のソフトウェアを利用して、“パイプライン”を構成する
- 人の作業を「アプリケーションのソースコードの投入」と「デプロイの承認」など最小限にして極力自動化することで、アプリケーションデリバリーまでの作業品質を均一化する。



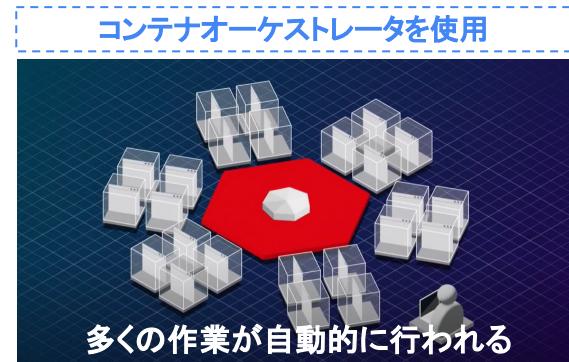
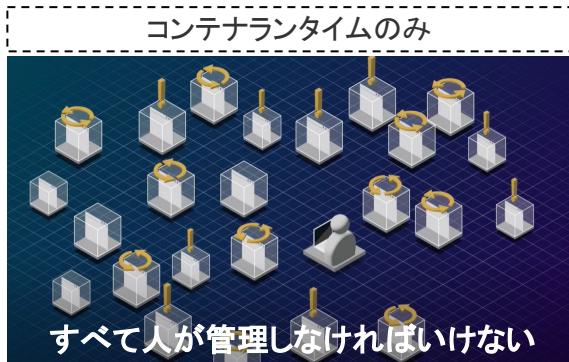
なぜKubernetesが必要なのか？

実稼働するシステムでコンテナを使うために

コンテナオーケストレータ = Kubernetes を使う

コンテナオーケストレータはコンテナの管理・運用を自動化し、ランタイムだけでは足りないシステムの可用性や運用性を提供します。

▶ コンテナの管理・運用を自動化



【人が行う作業】

- 属人的な障害復旧オペレーション
- 手動によるコンテナ変更作業
- アプリケーションごとの設定管理
- 定期的な監視作業

【人が行う作業】

- ビジネス変化に応じた適切なリソース調整

様々なクラウドでのコンテナアプリの実行

クラウドプロバイダごとに異なる実装やサービスの詳細を知る必要がなく、
コンテナアプリの実行状態を記述して、宣言的に実行できます。

```
apiVersion: apps/v1
kind: Deployment
metadata:
  name: nginx-deployment # デプロイの名前
spec:
  replicas: 3 # レプリカ数 (Podの数)
  template: # 作成される Pod のテンプレート
    metadata:
      labels: # Pod 管理に利用されるラベル
        app: nginx
    spec:
      containers:
        - name: nginx
          image: nginx:1.14.2
          ports: # 利用するポート番号
            - containerPort: 80
```

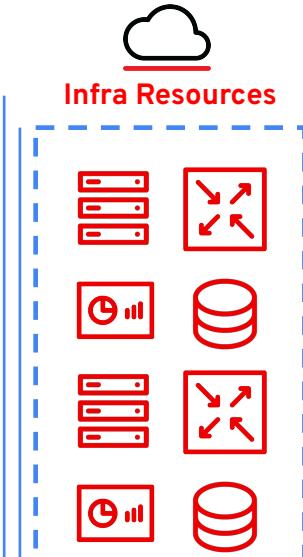
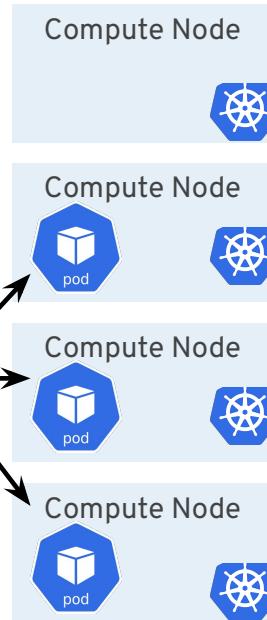
※ Pod: Kubernetes 上でのコンテナアプリの実行単位。

コンテナや、コンテナが利用する外部ストレージの設定などをまとめたもの。
基本的には、1 Pod = 1 コンテナアプリ、を想定。



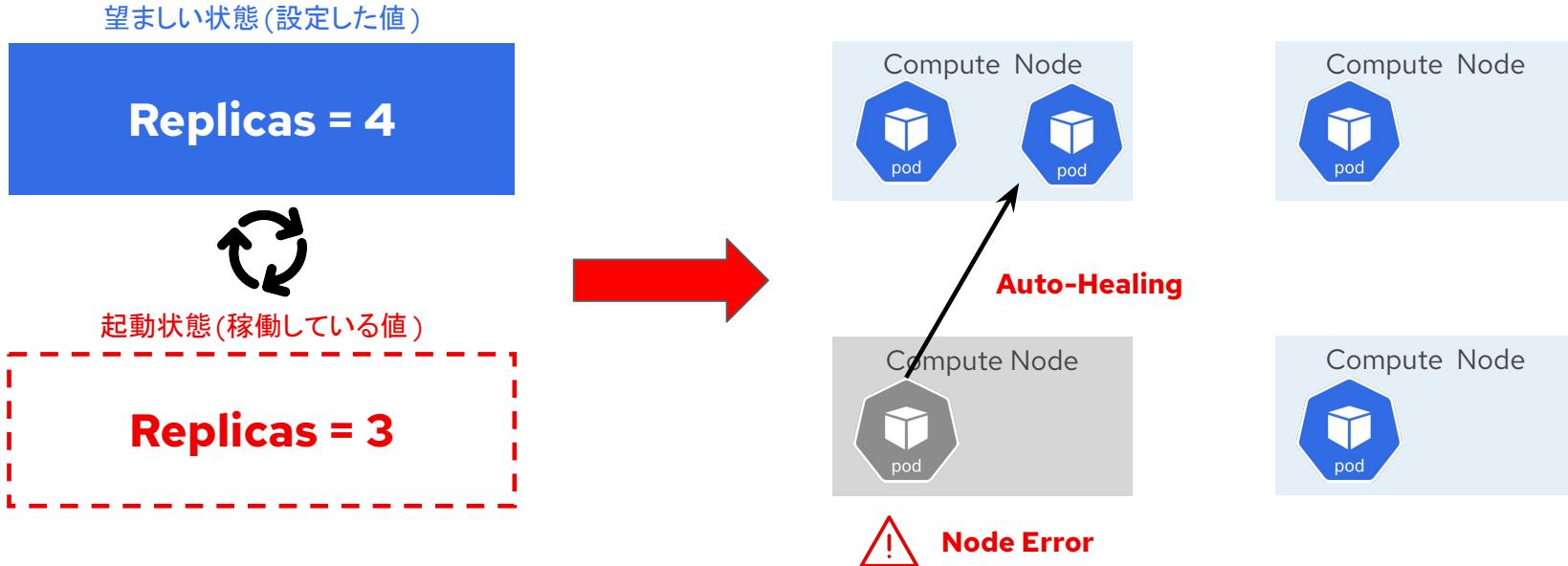
kubernetes

Deploy



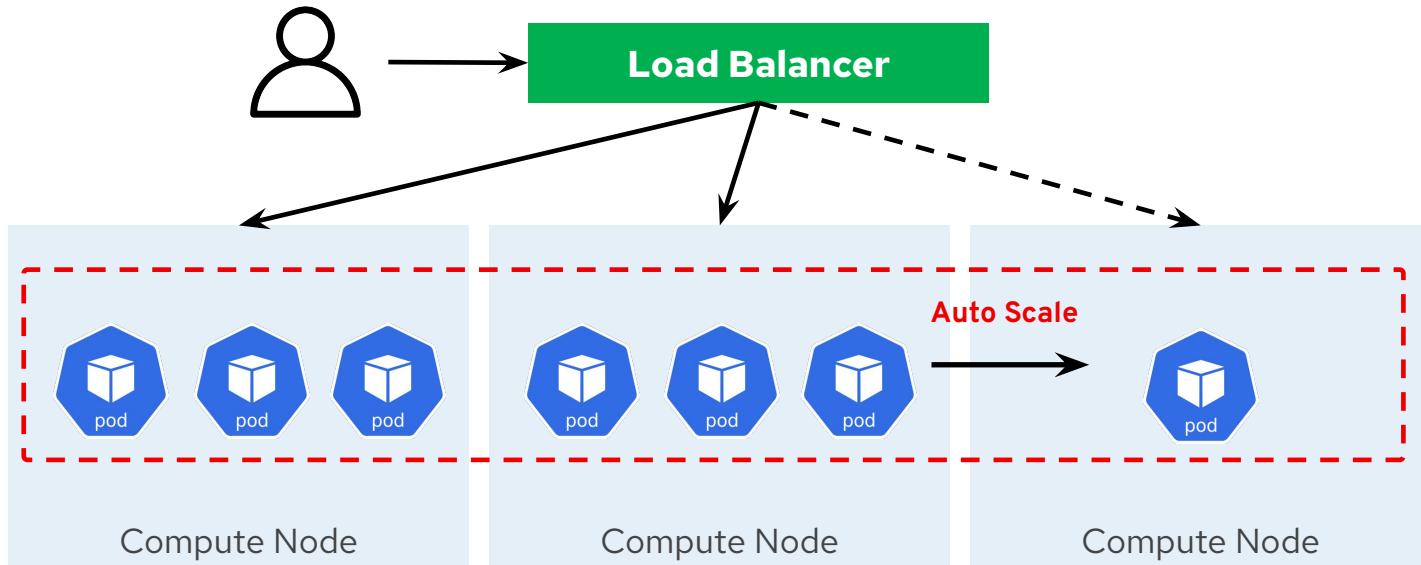
コンテナアプリの冗長性の担保 (セルフヒーリング)

Kubernetesは、現在のアプリケーションが望ましい状態に一致するように動作します。



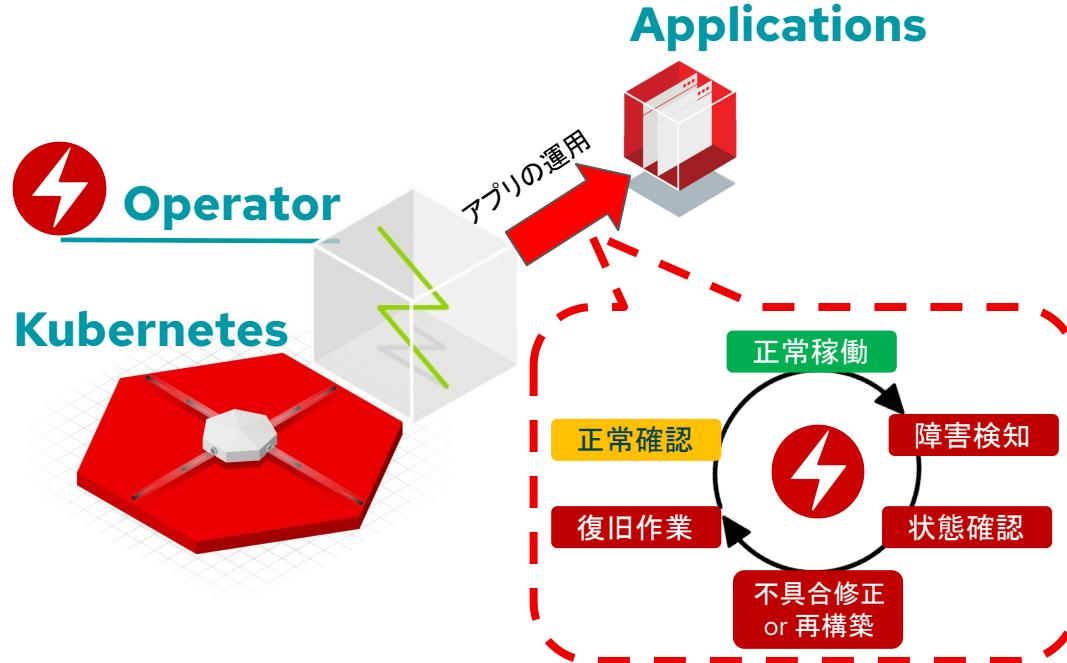
負荷状況に応じた動的なスケールアウト(オートスケーリング)

負荷状況に応じたスケールアウトや、不要なリソースの縮退を、動的に実行できます。



Operator(運用専用コンテナ)で、コンテナアプリの運用自動化

運用の知見やマニュアルをコード化し、ステートフルアプリケーションの運用を自動化



- アプリ運用のマニュアルをコード化及びパッケージングして、アプリの **運用専用コンテナ** として実行
- アプリ運用に必要となる、下記のような作業を自動的に実行
 - インストール
 - コンフィグデプロイ
 - アップデート
 - リソーススケーリング
 - バックアップ、リカバリー
 - モニタリング
 - ロギング
- アプリを利用したシステム構築や、障害復旧などの自動化を支援
- Operatorの開発フレームワークも提供

Kubernetesだけではできないこと

Kubernetesはコンテナの管理、運用に役立つ機能を提供しますが、それ単体だけではできないこともあります。コンテナのビルドやミドルウェアの管理には、Kubernetes以外のツールの連携が必要です。

Kubernetesでは提供されない機能

コンテナの動的
ビルド/デプロイ

ミドルウェア
の管理

クラスタの
ロギングや監視

コンテナの
セキュリティ

クラスタ
アップグレード



kubernetes



Bare metal



Virtual



Private cloud



Public cloud



Edge

Red Hat OpenShift

エンタープライズに求められる機能を Kubernetes に付随し、サポートすることで、ビジネス価値に直結する機能を提供しています。**アプリケーション開発の効率化に重きを置く点** が、インフラ運用の効率化に取り組むことを目的とした Kubernetes 単体利用と大きく異なる点です。



コンテナの動的
ビルド/デプロイ

ミドルウェア
の管理

クラスタの
ロギングや監視

コンテナの
セキュリティ

クラスタ
アップグレード



kubernetes



Bare metal



Virtual



Private cloud



Public cloud



Edge

Red Hat OpenShift の主な機能

OpenShiftで提供されるセルフ開発の利用例

Gitリポジトリのソースコードを利用して、OpenShift環境にNode.jsアプリをデプロイ

1

コンテナの動的
ビルド/デプロイ

Import from git

Git

Git Repo URL *

<https://github.com/jankleinert/concession-kiosk-backend>

› Show Advanced Git Options

Builder

Builder Image *



Builder Image Version *

IST 10

開発者は自身がアプリ開発に利用している
GitリポジトリのURLを指定

Node.jsのバージョンを選択

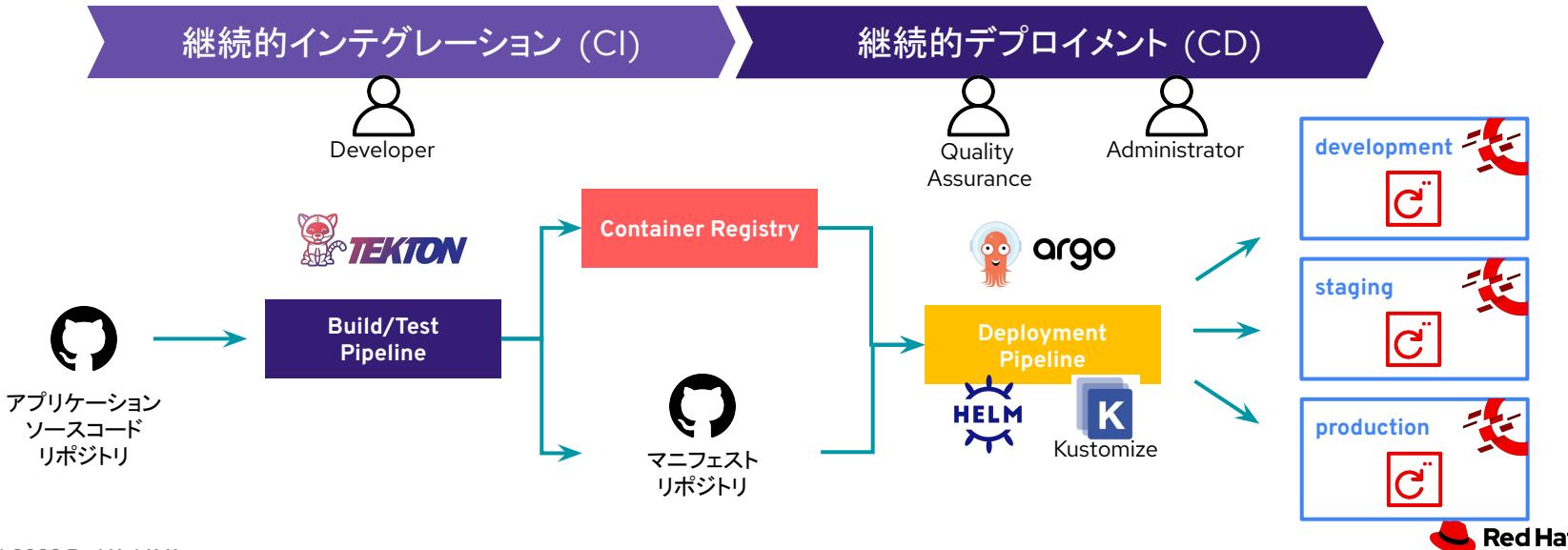
OpenShift上にデプロイするコンテナアプリ用
のビルダーイメージを選択 (この例では
Node.jsアプリをビルト・デプロイするために予
めOpenShiftで用意されている、専用のコンテ
ナイイメージを選択)

コンテナアプリのビルド/テスト/デプロイの完全自動化

1

コンテナの動的
ビルド/デプロイ

- OpenShiftに統合されたPipelines ([Tekton](#)) を利用可能
 - ソースコードの静的解析/ビルド、単体/インテグレーションテストを実施 (CI部分を担当)
 - サーバレスなアーキテクチャ
- OpenShiftに統合されたGitOps ([Argo CD](#)) を利用可能
 - GitリポジトリをSingle Source of Truthとし、デプロイ先の状態変化を自動検知して、定義された状態を維持
- TektonとArgo CDは、Operatorによって運用を自動化



WebブラウザベースのIDEを提供

1

コンテナの動的
ビルド/デプロイ

様々な開発環境のテンプレートを利用可能 (OpenShift Dev Spaces)

The screenshot shows the Red Hat CodeReady Workspaces interface. On the left, there's a sidebar with navigation links like 'Get Started Page', 'Workspaces', 'RECENT WORKSPACES', and '+ Create Workspace'. The main area is titled 'Getting Started with CodeReady Workspaces' and has a sub-section 'Select a Sample' with a 'Filter by' dropdown. Below this, there's a grid of 15 workspace templates:

- JBoss**: Java with JBoss EAP XP 2.0 Bootable Jar
- JBoss**: Java with JBoss EAP XP 2.0 Microprofile
- JBoss**: Java stack with OpenJDK 8, Maven 3.6.3 and JBoss EAP 7.3
- Red Hat Fuse**: Red Hat Fuse stack with OpenJDK 8 and Maven 3.6.3
- Tooling for Apache Camel K**: Tooling to develop Integration projects with Apache Camel K
- Java Gradle**: Java stack with OpenJDK 8, Maven 3.6.3, and Gradle 6.1
- Quarkus**: Java Quarkus
- Java Vert.x**: Java stack with OpenJDK 11, Maven 3.6.3 and Vert.x booster
- Java Maven**: Java stack with OpenJDK 11, Maven 3.6.3 and Vert.x demo application
- Java Spring Boot**: Java stack with OpenJDK 8, Maven 3.6.3 and Spring Boot Petclinic demo application
- NodeJS ConfigMap Express**: NodeJS stack with NPM 6.14.6, NodeJS 12.18.4 and ConfigMap Web Application
- NodeJS MongoDB**: NodeJS stack with NPM 6.14.6, NodeJS 12.18.4 and MongoDB
- C++**: C and C++ Developer Tools stack with GCC 8.3.1, cmake 3.11.4 and make 4.2.1
- .NET**: .NET Core SDK 3.1.003, Runtime, C# Language Support and Debugger
- Go**: Stack with Go 1.12.2
- PHP CakePHP**: PHP Stack with PHP 7.3.5, Apache Web Server 2.4.37, Composer 1.8.4 and a quickstart CakePHP application for OpenShift
- PHP-DI**: PHP Stack with PHP 7.3.5, Apache Web Server 2.4.37 and Composer 1.8.4
- Python**: Python Stack with Python 3.9.0

On the right side, there's a large terminal window showing the output of a 'start native' command for a Quarkus application. The terminal output includes logs for Dockerfile builds, Java compilation, and a successful build. It also shows a browser preview of the application at <http://localhost:8080/index.html>.

OperatorHub.io

<https://operatorhub.io/>

KubernetesのOperatorのカタログを掲載するポータルサイトです。Red HatとMicrosoft、Google、Amazon Web Servicesと共に2019年にローンチしました。



Red Hat Ecosystem Catalog

<https://catalog.redhat.com/software>

Red Hat製品が稼働するハードウェア・ソフトウェアの認定製品を検索できるポータルサイトです。ソフトウェア認定では、サードパーティのOperator認定とコンテナの認定があり、既に多くのソフトウェアが登録されています。



Red Hat Marketplace

<https://marketplace.redhat.com/>

Red Hat認定のOperatorを検索し、購入・デプロイ・管理を容易にするオープンクラウドマーケットプレイスです。Red Hat OpenShift環境で利用できます。

Red Hat Marketplace

2

ミドルウェアの管理

- Red Hat製品だけでなく、様々なパートナーのOperator(数百以上)を掲載
- OpenShiftではOperatorHubという形式で統合されており、Red Hat MarketplaceにあるOperatorを簡単にデプロイすることが可能

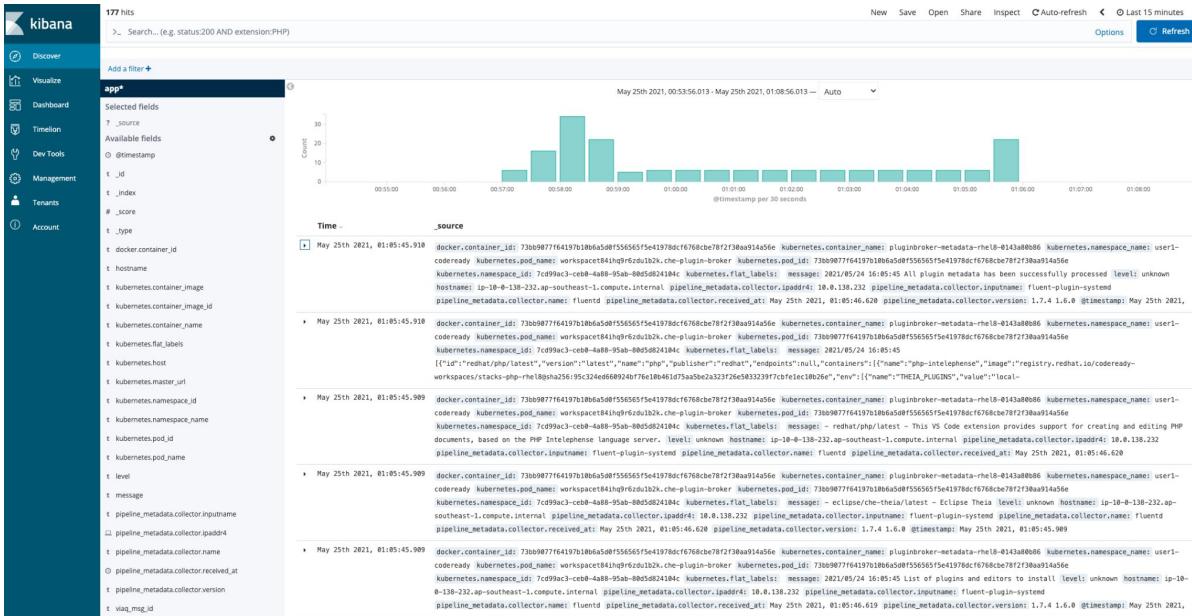
The screenshot shows the Red Hat Marketplace website interface. At the top, there's a navigation bar with links for Solutions, Sell with us, Blog, Docs, Support, a search bar, and buttons for Log in and Create account. Below the navigation is a sidebar with 'Product categories' like Featured products, AI/machine learning, Application runtime, Big data, Database, Datasets, Developer tools, Integration & delivery, Logging & tracing, Monitoring, Networking, Platform, Security, Storage, and Streaming & messaging. It also includes sections for 'Delivery methods' (Download, Operator, SaaS) and 'Certifications' (Enterprise ready). The main content area is titled 'All products' and shows 'Viewing 214 products'. A dropdown menu allows sorting by relevance. The page displays a grid of 20 product cards, each with a logo, name, developer, description, and rating. Some products shown include E.D.D.I., Anchore Enterprise, FP-PREDICT+, Ivory Service Architect, Modeling Tool, Densify, Red Hat Single Sign-On, Red Hat JBoss Enterprise Application Platform, Joget DX, Dynatrace, Lightbend Akka Platform Operator, Anaconda Team Edition, GigaSpaces InsightEdge, Hazelcast Jet, and Couchbase Server Enterprise Edition.

OpenShiftに統合されたロギング

3

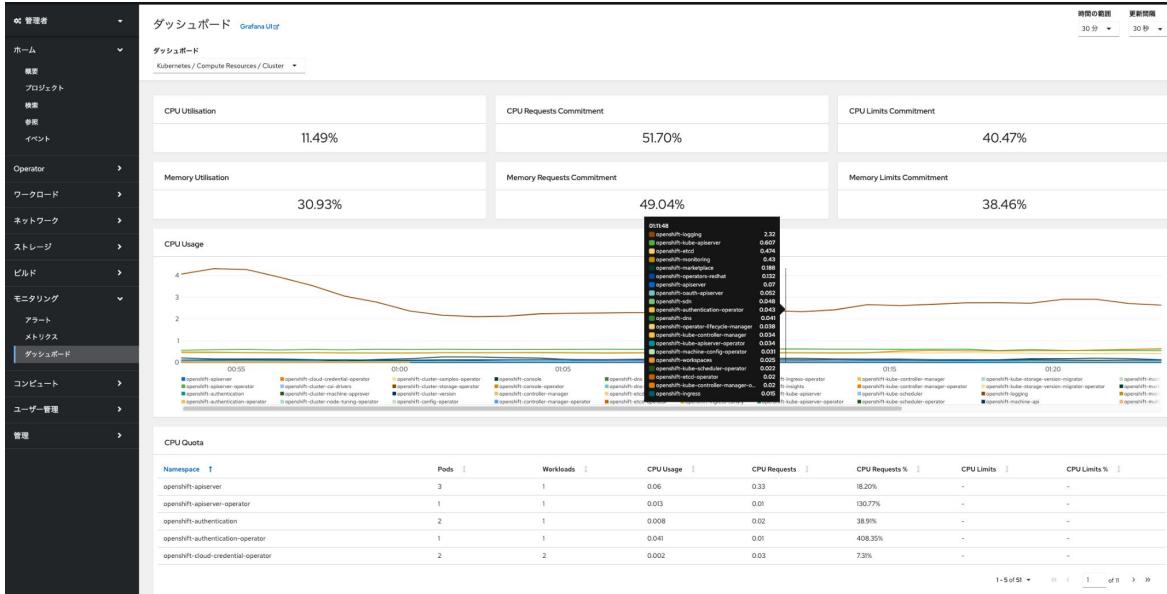
クラスタの
ロギングや監視

- ロギングには、Elasticsearch/Fluentd/Kibana (EFKスタック) を利用
- ユーザは自分が利用するプロジェクト上のアプリログ、管理者は全てのシステムログを参照可能
- ログは外部システムへの転送が可能
 - Elasticsearch、Fluentd/rsyslogを利用するログ集積システム、Apache Kafkaのブローカー



OpenShiftに統合されたモニタリング

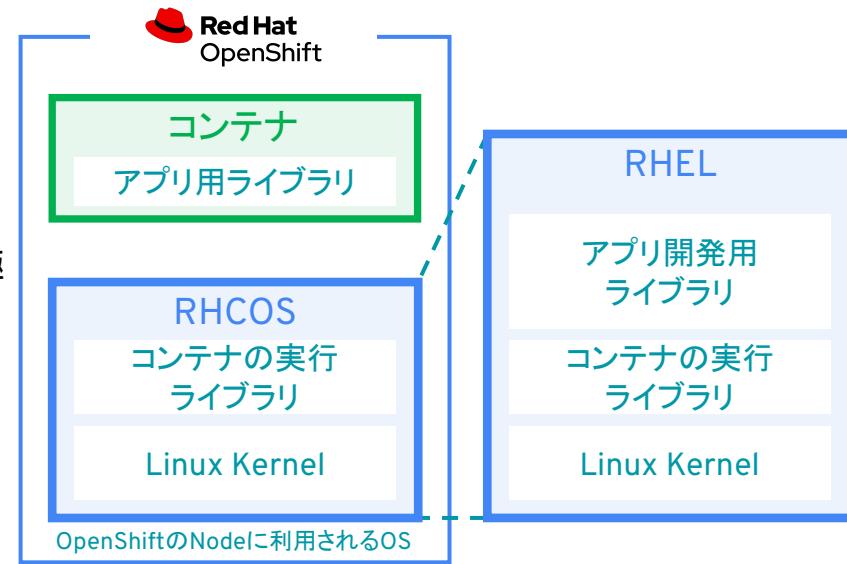
- モニタリングには、Prometheusを利用
- 管理者はOpenShift環境全体のリソース利用量や、API呼び出しのパフォーマンスなどを参照可能
- モニタリングによるアラートは、PagerDuty/Webhook/Email/Slackを利用した通知設定が可能



コンテナ利用に最適化された RHCOS(Red Hat Enterprise Linux CoreOS)を利用することによって、より安全かつ安定したコンテナ環境を提供します。

RHCOSは、RHELのKernelを利用しコンテナ実行に必要なライブラリだけを載せたコンテナ専用軽量OSです。
従来のRHELと同等の利用でサポートされます。

- OpenShiftと連携し、動的なUpgradeをOne-Clickで実現
- ライブラリが少ないため、セキュリティホールを生む可能性が極めて低い
 - そのため、多くのプログラムをOSの中で動かすことができない



ベースイメージの提供

4

コンテナの
セキュリティ

- コンテナベースイメージ(アプリケーションランタイム / SDK)をRed Hat Ecosystem Catalogにて提供
- セキュリティ脆弱性診断にも対応しており、**安心してコンテナイメージを利用可能**

The screenshot shows the Red Hat Ecosystem Catalog interface. On the left, there's a search bar with 'python' and a 'Search' button. Below it are filters for 'Provider' (Couchbase, IBM, New Relic, Red Hat, Inc.) and 'Category' (Application Delivery). The main area displays three container images for Python:

- Red Hat rhel8/python-27 Python 2.7** by Red Hat, Inc. (Platform for building and running Python 2.7 applications, updated 20 days ago)
- Red Hat ubi8/python-27 Python 2.7** by Red Hat, Inc. (Platform for building and running Python 2.7 applications, updated 21 days ago)
- Red Hat rhe8/python Python 3.8** by Red Hat, Inc. (Platform for building and running Python 3.8 applications, updated a month ago)

An orange arrow points from the search results to the detailed view of the Python 3.8 image. The detailed view shows a 'latest' tag, a 'Health index' (A), and a green checkmark indicating no unapplied security advisories. It also mentions the Container Health Index analysis is based on RPM packages signed and created by Red Hat.

OpenShiftのサブスクリプションに 含まれるベースイメージ

4

コンテナの
セキュリティ

「Software Collections(for RHEL7)」および「Application Streams (for RHEL8, RHEL9)」の
コンテナイメージのサポートが OpenShift のサブスクリプションに含まれています。

よく利用されることが多い、開発系の言語やデータベースなどのソフトウェアのバージョンの
サポート提供期間を短くする代わりに、バージョン更新頻度を高くしています。

Red Hat Enterprise Linux 7 Software Collections Product Life Cycle

Note

<https://access.redhat.com/ja/node/4654951>

Red Hat Enterprise Linux 8/9 Application Streams

Note

<https://access.redhat.com/support/policy/updates/rhel-app-streams-life-cycle>

Application Streamsの一部抜粋

Application Stream	Release Date	Retirement Date
mariadb 10.5	May 2021	May 2026
postgresql 13	May 2021	May 2026
python 3.9	May 2021	May 2024
redis 6	May 2021	May 2024
dotnet 5.0	Dec 2020	Jan 2022
nginx 1.18	Nov 2020	Nov 2022
perl 5.30	Nov 2020	Nov 2023
php 7.4	Nov 2020	May 2029

Over The Air (OTA) アップデート

5

クラスタアップグレード

- Cluster Version Operator (CVO) によるOpenShift 環境のアップデートの自動化
- CVOがネットワーク経由で、OpenShiftの有効なアップデート情報をチェックし、管理者に提示
- Web Consoleから簡単にアップデートを実行可能
 - 全てのコントローラ、コンピュートノードを、順番にアップデート (Self-ManagedのOpenShiftでは、一部のコンピュートノードをアップデート対象から外すことが可能)
 - コンピュートノードで Podが起動している場合、Podの停止→コンピュートノードのアップデートと再起動→Podの起動、を順番に実施
- 下記がアップデート対象
 - ホストOS (RHCOS)
 - OpenShiftのクラスタ管理サービス (Kubernetes, Monitoring, Networkなどを各種 Cluster Operatorによって管理)

クラスター設定

詳細 ClusterOperators グローバル設定



サブスクリプション

OpenShift Cluster Manager

クラスターID

a129b13a-d986-4ad9-93a9-7cacf186c374

必要なリリースイメージ

quay.io/openshift-release-dev/ocp-release@sha256:d74b1cfa81f8c9cc23336aee72d8ae9c9905e62c4874b071317a078c316f8a70

クラスターバージョンの設定

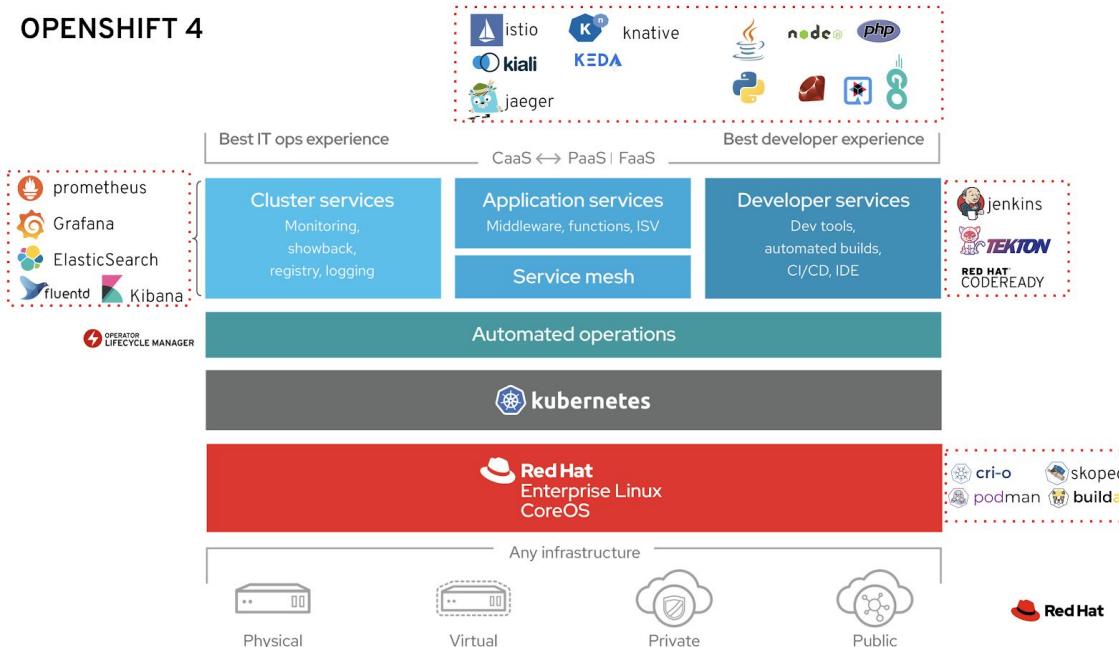
CV version

Cluster Autoscaler

Machine Autoscaler

Red Hat OpenShiftを構成するコンポーネント

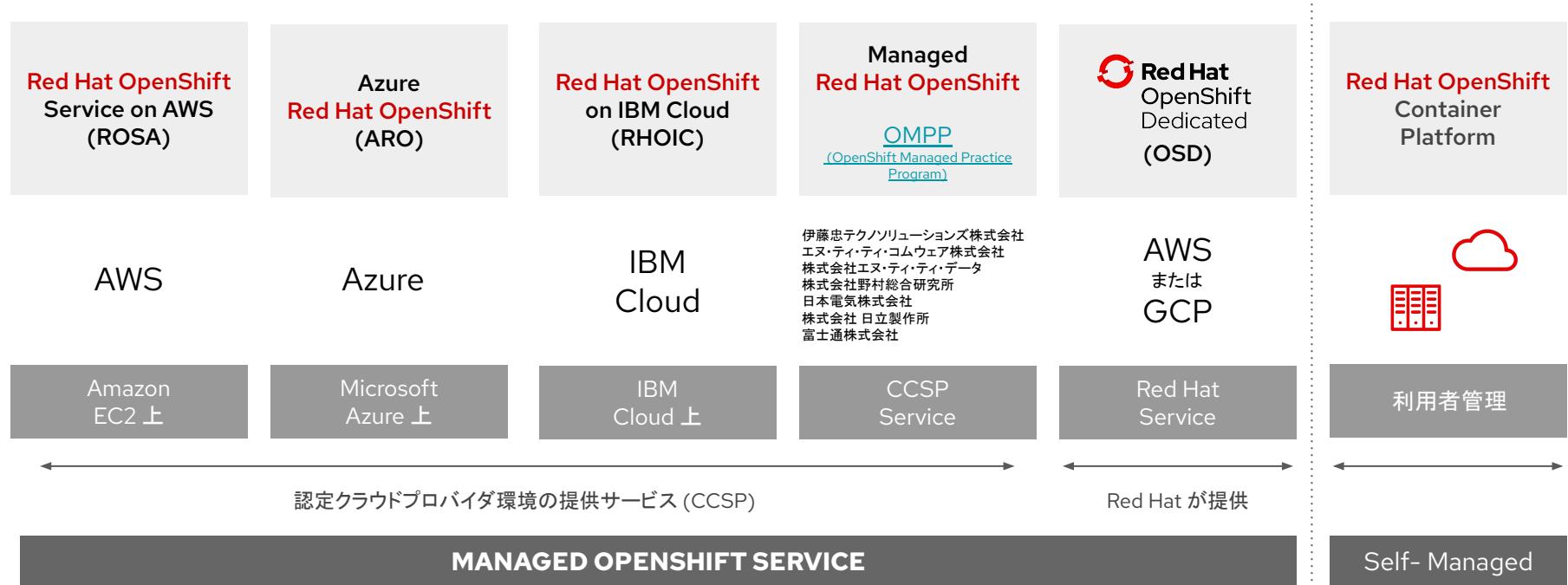
- 全てオープンソースソフトウェアであり、いくつかの主要なCloud Native Computing Foundation (CNCF) オープンソースプロジェクトで構成



Source: What's Inside OpenShift 4 <https://cloud.redhat.com/blog/whats-inside-openshift-4>

Red Hat OpenShift Everywhere

OpenShiftは、AWS上でも、Azure上でも、Google Cloud上でも、Red Hat OpenStack上でも、VMware上でも、オンプレのベアメタルサーバ上でも、[テス^ト済み](#)なので、場所を選ばずにどこでも同じ知識で運用を回す事ができるというのが大きな特徴です



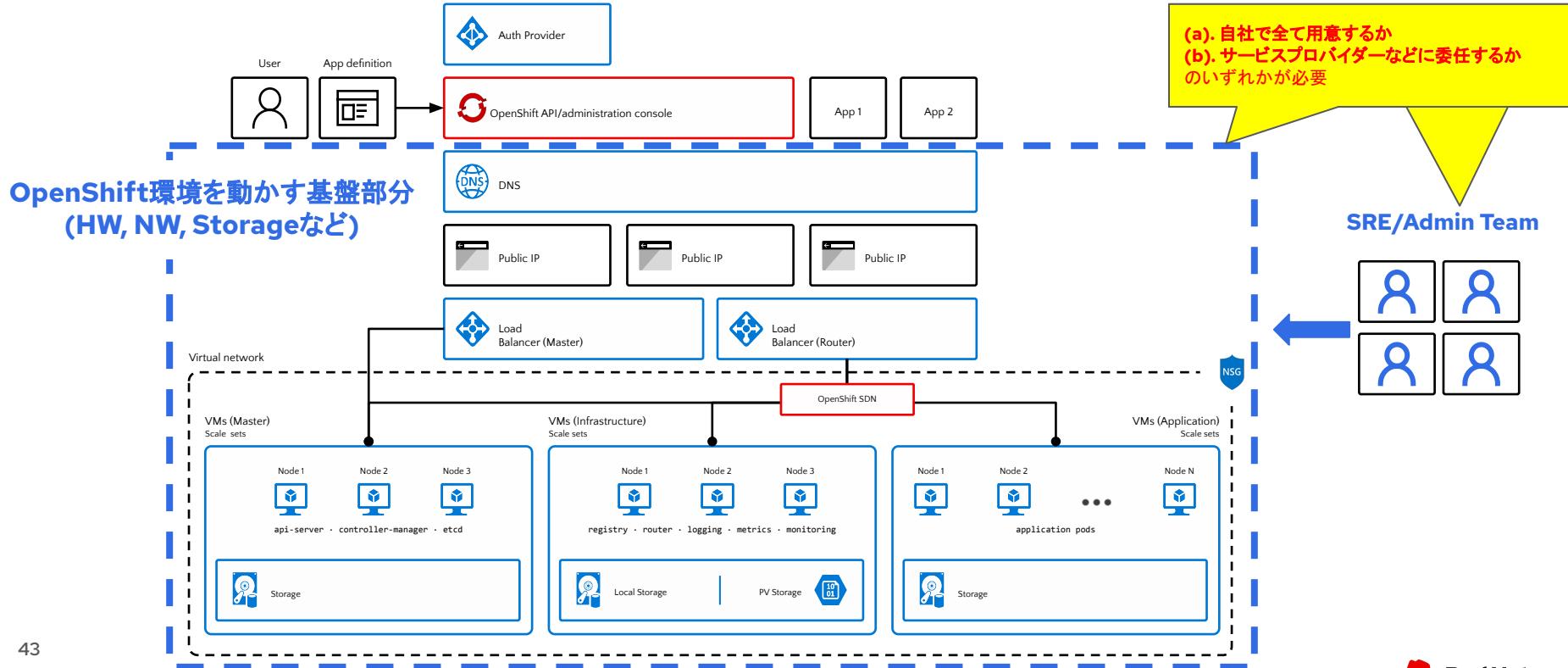
ここまでまとめ

- コンテナは、アプリケーション側に、より大きなビジネスメリットを提供
- コンテナは仮想マシンと同じように見えるが、様々な異なる特徴がある
- コンテナをうまく使うことで、アプリケーションの開発や運用を効率化可能
- 実稼働するシステムでは可用性や運用性が必要となるため、Kubernetesといった、コンテナオーケストレータを使うことが求められる
- Red Hat OpenShiftは、アプリケーション開発を効率化する様々な機能を提供
 - コンテナの動的ビルド/デプロイ
 - ミドルウェアの管理
 - クラスタのロギングや監視
 - コンテナのセキュリティ
 - クラスタアップグレード
- Red Hat OpenShiftは、様々なオンプレ/クラウド環境で実行可能

Managed OpenShift Service (OpenShift クラウドサービス)

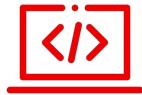
OpenShift環境の運用に必要なもの

- OpenShiftの運用には、ハードウェア、ネットワーク、ストレージなどの設計、運用、障害対応が必要
 - Kubernetesをはじめとしたハードウェア、ネットワーク、OSなどの知識や運用スキルが必要



Red HatがOpenShiftのManaged Serviceを推奨する理由

運用の複雑さを軽減し、開発者がアプリケーションの構築と運用に集中



素早い価値の提供

- ・管理されたクラスタを数十分で提供
- ・開発者の生産性を90%向上
- ・ビジネス付加価値の高いアプリケーションにフォーカスした開発を支援



運用効率の向上

- ・インフラリソースの管理から日常業務までFully Managed
 - 監視、ロギング、ネットワークなどを含む
 - ・柔軟な消費ベースの価格設定



24x365のサポート

- ・SLA 99.95% (ROSA, OSD)
- ・業界をリードするSREチームによる24時間365日のフルスタック管理とサポート
- ・完全監視、管理、更新



クラウドの選択肢

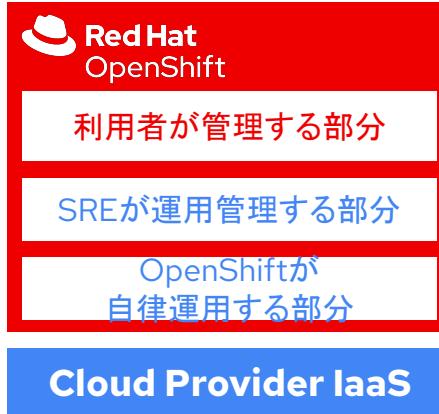
- ・すべての主要なパブリッククラウド上でManaged Kubernetesを提供する唯一の企業
- ・クラウドを超えた一貫したOpenShiftの経験

OpenShift運用管理の基本的な分類

SREが運用管理する部分

Red Hatやマネージドサービス
プロバイダのSREが行う作業

- Cluster Logging / Monitoring
- クラスタアップグレード
- クラスタ障害対応
- キャパシティ管理 など



利用者は、RHEL+Kubernetesの上で実行するアプリの設計・開発・運用、将来の成長性を見込んだスケールアウト・ダウン、共同開発グループを作成するためのユーザー管理、に集中できます。

言い換えると、これら以外の項目の変更や管理をしたい場合、マネージドでない、通常のOpenShiftのご利用を推奨します。

利用者が管理する部分

サービス利用に伴う作業

- テナント(Project)設計
- アプリ開発・運用、アプリのデータ管理
- クラウドのストレージ、ネットワークを利用するための設定
 - ストレージプール設定
 - プライベートネットワーク設定など
- Compute Node の追加・削除・ラベル付加、の実行指示
- ユーザー管理 (RBAC含)
- プラットフォーム監査ログ要求 など

OpenShiftが自律運用する部分

Cluster Operatorによって
動的に管理されるもの

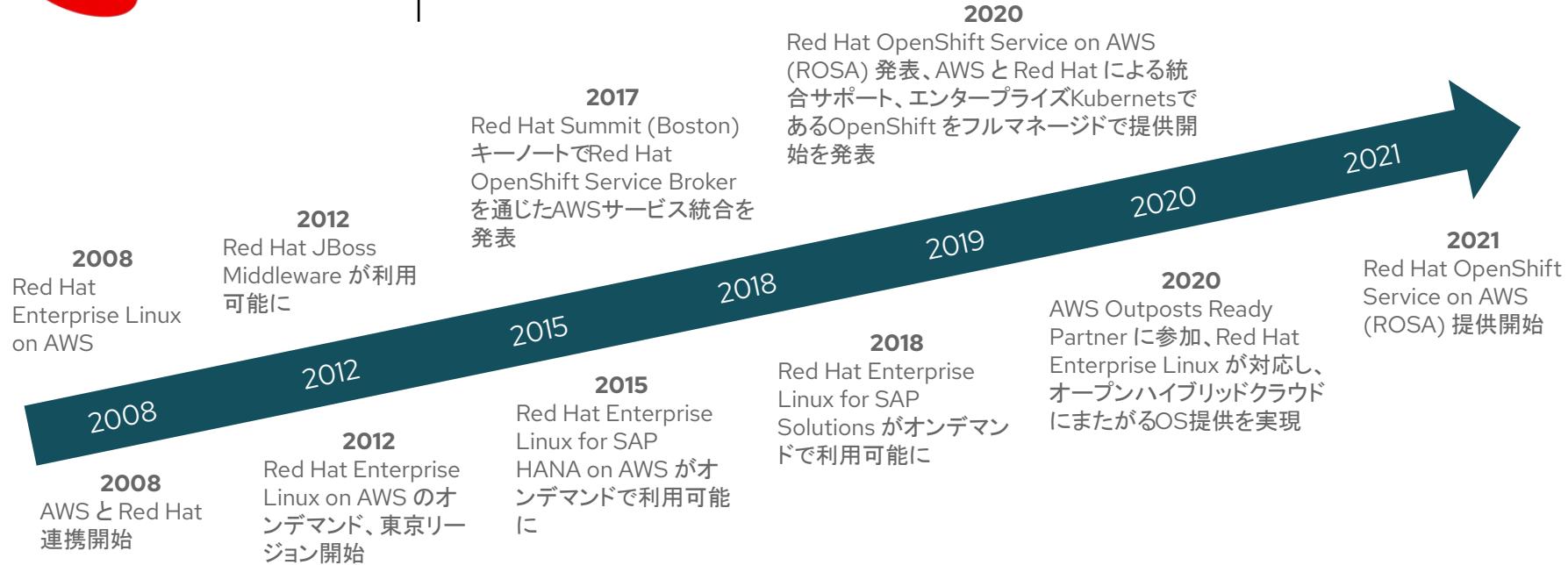
- クラスタ作成 (API経由で作成)
- Controller / Compute Nodeの保守
- IaaSの制御
 - クラウドのストレージ、ネットワークの払い出しなど

Red Hat OpenShift Service on AWS (ROSA)

AWS と Red Hat の長年に渡る連携

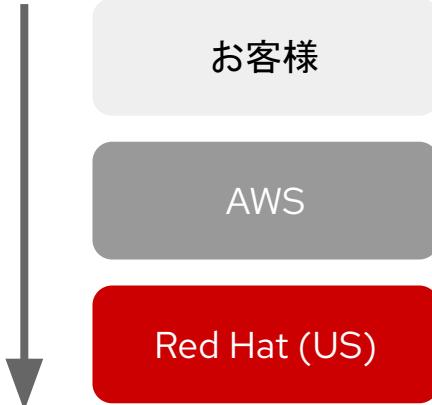


AWS

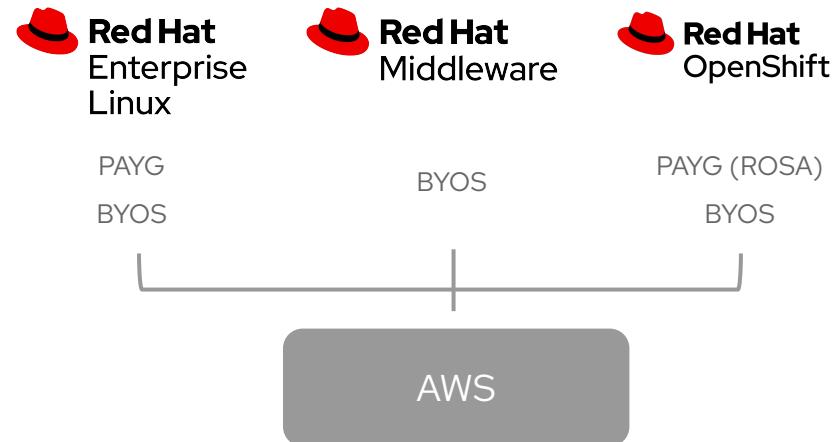


サポートスキームと利用可能製品

従量課金(PAYG) の
サポートスキーム



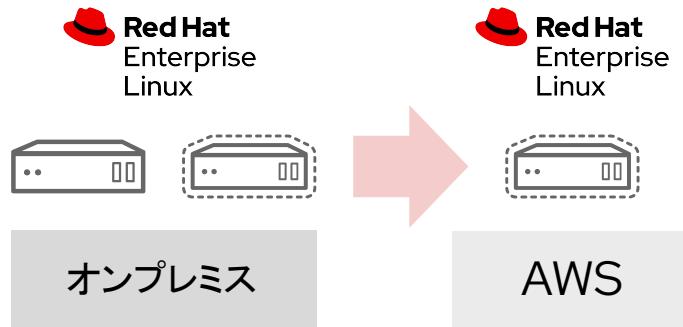
様々な Red Hat 製品が
Amazon EC2 上で利用可能



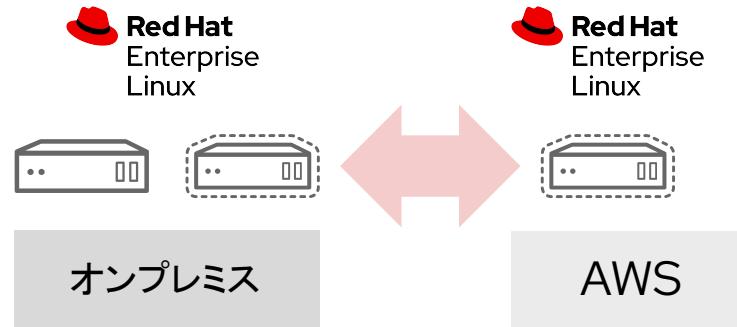
ハイブリッド、コンテナのニーズ

- クラウド移行、コンテナ化のニーズ
- オンプレミスとクラウドで Red Hat を併用する傾向が増加

移行するシステム



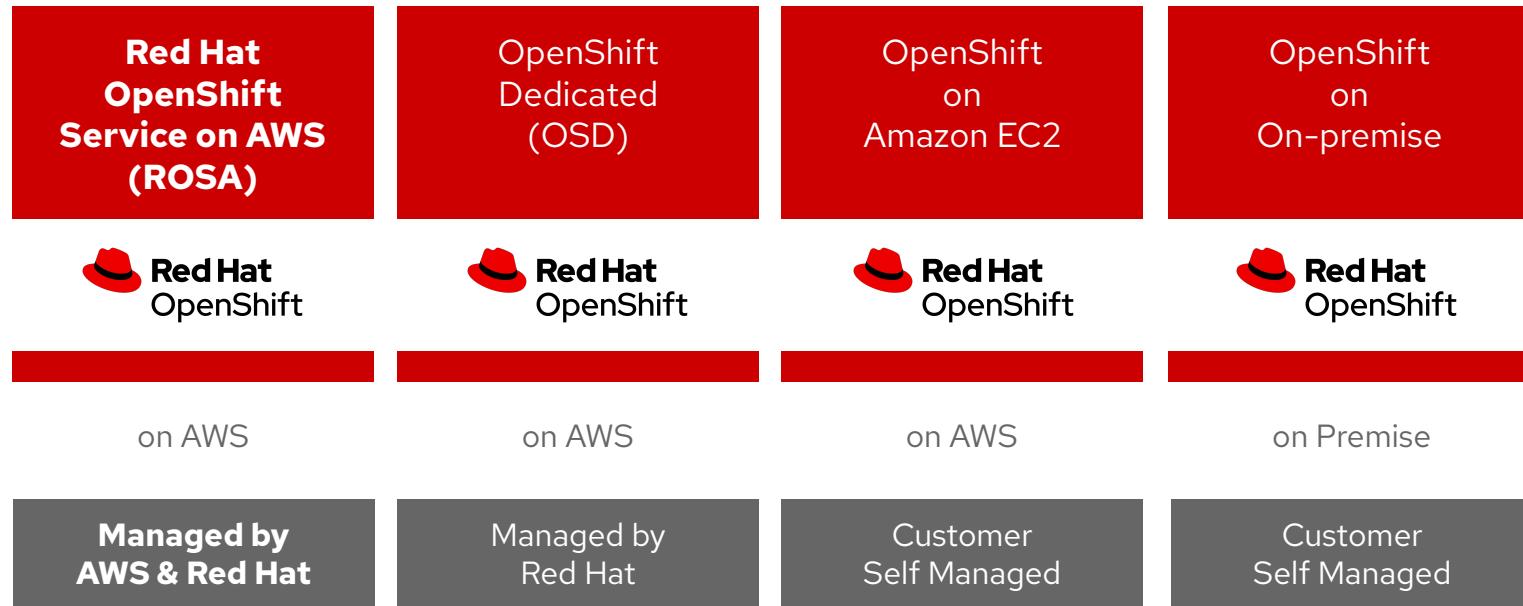
併用するシステム



コンテナ化の要望

Red Hat OpenShift on AWS

コンテナ導入 = OpenShift は 様々な環境で利用可能



コンテナ化によるポータビリティが可能

Red Hat OpenShift Service on AWS (ROSA) の利用メリット



Red Hat OpenShift Service on AWS (ROSA)

レッドハットとAWSが共同でサ
ポートするAWS上のフルマ
ネージドOpenShiftサービス



Clear path to hybrid cloud deployments

ビジネスニーズに応じたワークロードを AWSのパブリッククラウドに移行することを容易
にすることで、オンプレミスで利用している Kubernetesをクラウドでも利用できます。



Empower developers to innovate

AWSの使い慣れたAPIやサービスと、Red Hat OpenShiftに付属されている開発ツール
を組み合わせることによって、迅速に開発環境を構築します。



Flexible, consumption-based pricing

ビジネスニーズに応じた拡張性と、オンデマンドの課金モデル（時間または年間）による
柔軟な価格設定で、必要なリソースだけ支払うことができます。

ROSAの契約形態

- 「ROSA」は、AWSの請求書にまとめたいお客様を想定した、従量課金のサービス

ROSA	
処理主体 (Transacted)	AWS
請求元 (Billed by) ※1	AWS
契約条件 (Contract terms)	AWS
マネージド管理主体 (Managed by) ※2	AWS + Red Hat
サポート作業主体 (Supported by) ※3	AWS + Red Hat

※1: 請求元が発行する請求書には、OpenShiftサービスの利用料金や、仮想マシンやストレージなどのクラウドサービスの利用料金が記載されます。

※2: ロギング、モニタリング、プラットフォームのアップグレード、セキュリティ、などを担当する主体者。

※3: インストール、利用方法、設定、問題診断、バグ解決などに関して、チャット、電話、メールなどでの問い合わせ対応を実施する主体者。

ROSAの主なサービス仕様

Specification

ROSA

デフォルトの
アーキテクチャ
(シングルAZを利用)

Controller Node: m5.2xlarge x3
Infra Node: r5.xlarge x2
Compute Node: m5.xlarge x2

Max Compute Nodes

180

対応リージョン

東京, 大阪リージョン
他リージョン

プライベートクラスター

対応 ([ROSA](#))
(ROSAでは、AWS VPC peering, AWS VPN, AWS Direct Connect が利用可能)

IDプロバイダー (認証)

GitHub, GitHub Enterprise, GitLab, Google, LDAP, OpenID Connect, HTPasswd

アドオンサービス

Amazon CloudWatch (ログ転送)
Red Hat OpenShift API Management (3Scale)

アップグレード作業

Red HatによるOpenShiftの自動アップグレード
(お客様による、アップグレード時間の設定が可能)

SLA

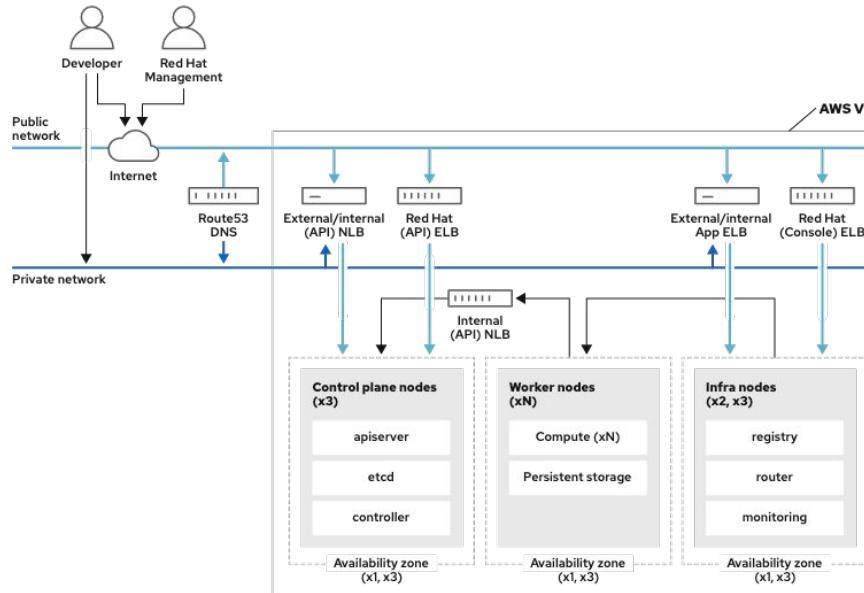
99.95%

ROSAのアーキテクチャモデル 1

https://docs.openshift.com/rosa/roса_architecture/roса_architecture_sub/roса-architecture-models.html

<https://aws.amazon.com/jp/blogs/containers/red-hat-openshift-service-on-aws-architecture-and-networking/>

- パブリック及びプライベートネットワークを利用したアーキテクチャモデル
- コントロールプレーンとインフラノード(ユーザアプリへのルーティング機能を提供)は、ROSA環境作成時または作成後にプライベート化の設定が可能
 - External API NLB, External App ELBの有無がパブリックとプライベートの違い

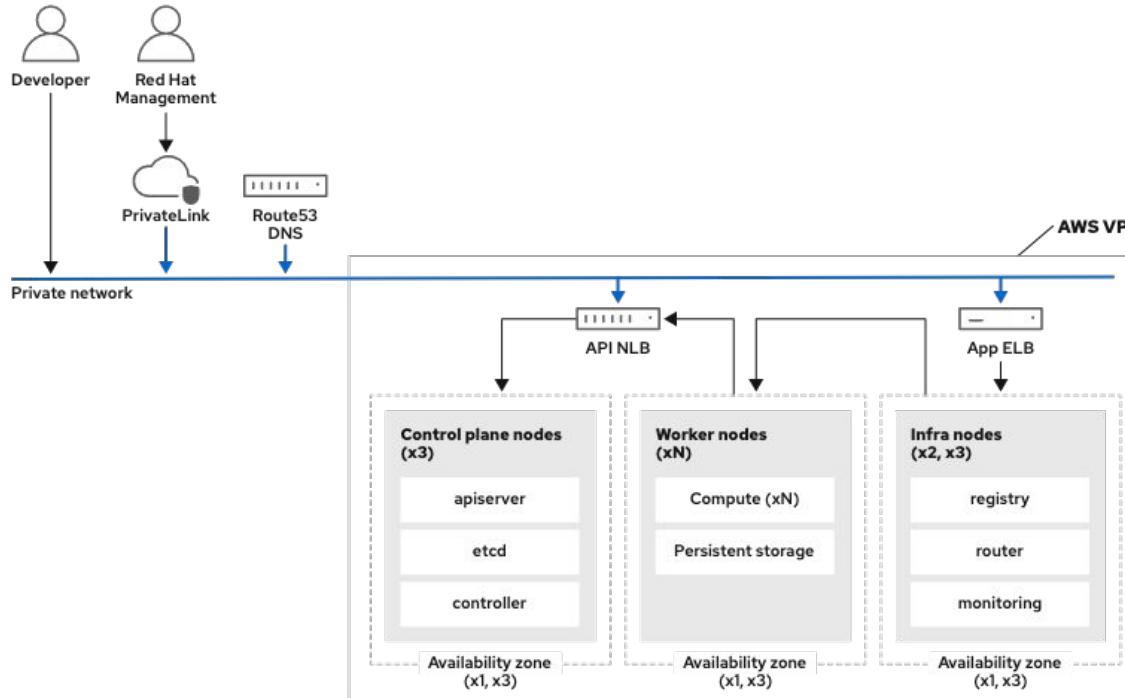


ROSAのアーキテクチャモデル 2

https://docs.openshift.com/rosa/roса_architecture/roса_architecture_sub/roса-architecture-models.html

<https://aws.amazon.com/jp/blogs/containers/red-hat-openshift-service-on-aws-architecture-and-networking/>

- AWS PrivateLinkを利用したアーキテクチャモデル
- AWS VPCのパブリックサブネットなどの追加により、アプリの外部公開が可能



ROSA overview of responsibility assignment matrix

- クラウドプロバイダがIaaS基盤、Red HatがOpenShiftを管理
- お客様は、アプリ、アプリの{データ、ロギング、ネットワークポリシー}、VPN/VPC接続、クラスターのプライベートネットワークなどを管理
- 詳細: https://docs.openshift.com/rosa/roса_architecture/roса_policy_service_definition/roса-policy-responsibility-matrix.html

Resource (ROSA, OSD)	Incident and operations management	Change management	Identity and access management	Security and regulation compliance	Disaster recovery		
Customer Data	Customer						
Customer applications	Customer						
Developer services	Customer						
Platform monitoring	Red Hat						
Logging	Red Hat	Shared			Red Hat		
Application networking	Shared		Red Hat				
Cluster networking	Red Hat	Shared		Red Hat			
Virtual networking	Shared						
Master and infrastructure nodes	Red Hat						
Worker nodes	Red Hat						
Cluster version	Red Hat	Shared	Red Hat				
Capacity management	Red Hat	Shared	Red Hat				
Virtual storage	Red Hat and cloud provider						
Physical infrastructure and security	Cloud provider						

ROSAのバックアップポリシー

※STSクラスターの場合は、バックアップ&リカバリーポリシーがありません

クラスタ内のすべての Kubernetes オブジェクトと PV は、万が一クラスタが修復不可能な状態になった場合に迅速なリカバリーを行うためにバックアップされます。ただし、**アプリケーション、およびアプリケーションデータのバックアップは、サービスの一部ではありません。**

バックアップは、クラスタと同じアカウントの安全なオブジェクトストレージ、またはマルチプル AZ のバケットに保存されます。Red Hat Enterprise Linux CoreOS はクラスタによって完全に管理されており、ノードのルートボリュームにステートフルなデータを保存してはいけません。したがって、**ノードのルートボリュームはバックアップ対象ではありません**。

詳細: https://docs.openshift.com/rosa/roса_policy/roса-service-definition.html#roса-sdpolicy-backup-policy_ roса-service-definition

コンポーネント	スナップショットの頻度	保持期間	注釈
完全なオブジェクトストアのバックアップ、すべてのクラスター PV	日次	7日	これは、すべての Kubernetes オブジェクト、およびクラスターにマウントされるすべての PV の完全なバックアップです。
	週次	30日	
完全なオブジェクトストアのバックアップ	毎時 (1時間ごとに17分を経過した時点)	24時間	これは、すべての Kubernetes オブジェクトの完全バックアップです。このバックアップスケジュールでは、PV はバックアップされません。

ROSAのライフサイクル

- メジャーバージョンは、後続のメジャーバージョンの提供開始から1年経過するまで、サポートを提供 (例: v4は、v5リリース後1年経過するまでサポート)
- マイナーバージョンは、「基本的に」9ヶ月間のサポートを提供 (EUSは無し)
- 特定のマイナーバージョンを対象とした、重要なバグ修正、脆弱性修正は、提供開始から2営業日以内に適用の必要あり (2営業日以降は、自動適用の可能性あり)
- 詳細: https://docs.openshift.com/rosa/roса_policy/roса-life-cycle.html#roса-life-cycle-dates_ roса-life-cycle

Version	General availability	End of Life
4.10	2022年3月10日	2023年1月10日
4.9	2021年10月18日	2022年9月28日
4.8	2021年7月27日	2022年8月31日
4.7	2021年3月24日	2021年12月17日

参考: ROSA 利用料金モデル

<https://aws.amazon.com/jp/rosa/pricing/>

- Control Plane x3 / Infra Node x3 / Compute (Worker) Node x9 (Multi-AZ) での1年間利用を想定

ROSA service fees	
Worker node service fee: 9 m5.xlarge nodes x \$1,000 per 4 vCPU per year	\$9,000
Per cluster fee*	\$263
ROSA service fee subtotal	\$9,263
AWS infrastructure fees for US-East (N. Virginia)	
Worker nodes	
Amazon EC2: 9 m5.xlarge nodes x \$990 per node annually	\$8,910
Amazon EBS: 9 300GB General Purpose SSDs x (\$0.10 per GB per month + 2 daily snapshots)	\$5,345
Infrastructure nodes	
Amazon EC2: 3 r5.xlarge nodes x \$1,297 per node annually	\$3,891
Amazon EBS: 3 300GB General Purpose SSDs x (\$0.10 per GB per month + 2 daily snapshots)	\$1,782
Control plane nodes	
Amazon EC2: 3 m5.2xlarge nodes x \$1,978 per node annually	\$5,940
Amazon EBS: 3 350GB Provisioned IOPS 1000 x (\$0.125 per GB per month + 2 daily snapshots)	\$4,707
AWS infrastructure fee subtotal	\$30,575
ROSA service fee subtotal	\$9,263
AWS infrastructure fee subtotal	\$30,575
Total estimated annual price***	\$39,838

参考: ROSAの関連情報

- ROSA 公式ドキュメント (英語版)
 - <https://docs.openshift.com/rosa/welcome/index.html>
- ROSA 公式ドキュメント (上記英語版を翻訳した、日本語版)
 - https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openshift_service_on_aws/4
- コンテナ環境をすぐに構築できる「Red Hat OpenShift Service on AWS (ROSA)」とは
 - https://japan.zdnet.com/pickup/rhaws_202105/35172151/
- AWSとRed Hat アーキテクト対談: AWS利用者必見！エンタープライズ向けコンテナ環境のあり方
 - https://japan.zdnet.com/pickup/redhataws_202201/35182119/



Thank you

Red Hat is the world's leading provider of enterprise open source software solutions. Award-winning support, training, and consulting services make Red Hat a trusted adviser to the Fortune 500.



[linkedin.com/company/red-hat](https://www.linkedin.com/company/red-hat)



[facebook.com/redhatinc](https://www.facebook.com/redhatinc)



[youtube.com/user/RedHatVideos](https://www.youtube.com/user/RedHatVideos)



twitter.com/RedHat